

【論考】

# 中国語圏における現代書院制教育

マカオ  
- 澳門大学の事例を中心に -

Education of Modern Residential College in the Chinese-speaking World:  
A Case Study of the University of Macau

帝京大学外国語学部准教授 山崎 直也

YAMAZAKI Naoya

(Faculty of Language Studies, Teikyo University)

キーワード：澳門大学、寄宿式書院制、外国人留学生宿舍

## はじめに

今年7月、4回目の海峡兩岸<sup>および</sup>暨港澳地区高校現代書院制教育論壇<sup>フォーラム</sup>が中国の西安交通大学で開催された。60を超える大学から450人余りの参加者が集い、「現代書院の内容と通識教育」を焦点として議論が交わされた（「通識教育」は英語の general education に相当する中国語）。最終的に、22大学39本の論文が採択されたが、27大学から108本の投稿論文が寄せられる盛況であったという<sup>1</sup>。

「海峡兩岸暨港澳地区」とは、中国・台湾・香港・マカオのことであり、中国語で「高校」とは、高等教育機関を意味する。説明を要するのは、「現代書院制」の部分であろう。一般に書院と言え、中国を中心に日本、朝鮮、ベトナムに広がった前近代の私教育機関を意味する。中国では、唐代に始まり、宋代に大きく発展、主に民間における科挙対策の担い手として台湾を含む各地に開設されたが、清朝末期の科挙の廃止を受けて、中西兼学、即ち、中国の伝統的学問とともに西洋の先進的な知識を教える「学堂」に再編された<sup>2</sup>。科挙制度を導入しなかった日本では、教育機関として根づくことはなかったが、「書院造」という建築用語に往時の影響の名残りを留めている。しかし、「現代書院制」を

<sup>1</sup> 「第四届海峡兩岸暨港澳地区高校現代書院制教育論壇在西安交大開幕」『高校書院聯盟ウェブサイト』<http://sylvm.buaa.edu.cn/info/1055/1338.htm> (2017年8月25日閲覧)。

<sup>2</sup> 伝統的な書院の概念について詳しくは、吾妻重二(2008)「東アジアの書院について—研究の視角と展望—」『東アジアにおける書院研究』(『東アジア文化交渉研究』別冊2号)、3-20頁を参照。

掲げる同フォーラムは、儒教（朱子学）を基礎とする東アジアの伝統的教養教育の復権を提唱するものではない。近年、中国語圏の高等教育改革の中で、「書院」という言葉は、新たな意味を獲得しつつあり、「書院」の名の下で改革に取り組む大学間のプラットフォームとして、2014年に高校書院聯盟が成立、以来、会員校の持ち回りで毎年フォーラムが開催されている。「現代」と「制（度）」の二語に挟まれた今日の「書院」が伝統的な書院の概念と一線を画すことは明らかだが、中国語圏の各大学の「書院」と称する取り組みは、多様な形態を含み、明確な定義は難しい。

本稿では、近年、中国語圏の大学が導入を進める「書院」の概念を検討した上で、本年7月3日に筆者を研究代表者とする科研費「レジデンシャル・カレッジの導入と定着にみる中台港澳高等教育改革比較研究」（課題番号 16K04625）の企画として実施した葉銘泉澳門大学呂志和書院長の講演から、澳門大学の「住宿式書院制」の実態を紹介する。

日本ではまだ情報に乏しい中国語圏の高等教育改革の一面を扱う本稿は、「外国人留学生の宿舍支援と活用」という今号の特集との関連性が希薄に見えるかもしれない。しかし、筆者は、上述科研費の申請にあたり、本誌2015年9月号と2016年9月号の同趣旨の特集を参考にしており、本年2月には、2015年9月号の寄稿者である吉田千春氏と澳門大学呂志和書院を訪れている。また、2016年11月には、「書院」を研究する台湾の研究者を伴い、早稲田大学国際学生寮WISHと京都産業大学の追分寮<sup>3</sup>を視察したが（WISH視察は吉田氏も参加）、このことは、中国語圏の大学による「現代書院制」の展開と日本の大学による学生寮の教育寮化の動きが共通の問題意識に根差し、相互に学ぶべき部分を持つとの認識ゆえである。こうした経緯に鑑みて、アジア型レジデンシャル・カレッジの一事例と言うべき澳門大学の住宿式書院制は、日本の高等教育改革、就中今号の特集の関心層に訴求する部分があると確信している。

## 1. 「書院」とは何か？

英国の影響下で、早くも1950年代に「書院制度（カレッジ・システム）」を導入し、時代を超えてそのユニークな伝統を受け継いできた香港中文大学<sup>4</sup>を例外として、今日、中国・台湾・マカオの大学に広がる「書院」は、いずれも2000年代以降の新しい取り組みである。

「書院教育は、今世紀におけるグローバルな高等教育の新たな方向性であり、新たな趨勢である。書院は、学生の品格、集団生活、健康な心身などの育成を目的とする。中国古代の書院制度と英米のケンブリッジ大学、オックスフォード大学、イエール大学などのカレッジ・システムを受け入れて、

<sup>3</sup> 京都産業大学を視察先としたのは、同大学の学生寮が生活寮ではなく教育寮であることを明確に打ち出しているためである。同大学の学生寮の理念は、「学生寮とは」『京都産業大学ウェブサイト』[https://www.kyoto-su.ac.jp/facilities/sd/sd\\_about.html](https://www.kyoto-su.ac.jp/facilities/sd/sd_about.html)（2017年8月25日閲覧）を参照。

<sup>4</sup> 香港中文大学の書院制度の説明は、<http://www.cuhk.edu.hk/english/college/system.html>（2017年8月29日閲覧）を参照。

華人地域の各大学は、21世紀に至り雨後の筍のごとく書院を設立している<sup>5</sup>という一文は、2016年7月に澳門大学が3回目の現代書院制教育論壇を主催した際の澳門特別行政区政府のニュースリリースの説明であり、21世紀の中国語圏の各地域で同時並行的に進行する現象の全体イメージを端的に伝えるものだ。つまり、中国と西洋の教育の伝統を結合した「住学合一」（生活と学びの融合）に向けた動き、端的には、アジア版（あるいは華人版）レジデンシャル・カレッジの創設の動きに見えるが、中国語圏の大学の「書院」（北京大学元培学院のように「学院」と称する場合もある）と銘打つ取り組みをつぶさに見てみると<sup>6</sup>、かならずしも residential（居住型、中国語では「住宿式」と表現）とはかぎらず、正規カリキュラム外の教育プログラム（単位を取得できる場合とそうでない場合がある）や数日間の行事を「〇〇書院」と称する事例もある。いずれにせよ、今日の中国語圏の「書院」は、欧米のレジデンシャル・カレッジの同義語ではなく、より広い意味を含んでいる。

本稿では、中国語圏の各大学の「書院」を一つ一つ検討する紙幅はないが、全体の傾向を見ると、居住型か非居住型かという決定的な違いのほかに、自立性の有無（専従のスタッフを持ち、独自の決定を行うことができるか）、ある単位の下に位置づけられる場合、上は行政組織（例えば、学生課）か、教学組織（例えば、全学教育センター）か、規模は全学実施か、一部希望者のみが対象か、学生選抜の方式は無作為抽出（学部学科を超えた混住）か、学部学科ごとか、エリート主義を志向するか否か、留学生の有無、正規カリキュラムの枠内か枠外かといった点で、大学により相違が見られる。

しかし、実施形態の違いはあれ、今日の中国語圏の「書院教育」には、次のような共通の特徴が認められる。第一に、「書院」は、明示的であれ非明示的であれ、「博雅（リベラルアーツ）教育」を重視する。中国・中山大学の博雅学院、台湾・東海大学の博雅書院のように、「博雅」の二文字をそのまま名前に冠する事例もあるが、「専才」（1つの専門分野に精通した人材）ではなく「通才」（広範な分野に通じた人材）の育成が基本である。また、カリキュラム上の通識教育課程（全学教育課程）の一部をなす場合もあるが、学部学科の強固な縦割りと専門教育偏重に対するアンチテーゼが各大学の書院に通底する問題意識となっている。

第二の特徴は、全人教育の重視であり、これは知育一辺倒への反省に根差している。中国語圏には「五育」という考えがあり、道徳観・知識・体力・社会性・審美眼の均衡のとれた発達が教育の理想とされるが、厳しい受験競争の中で知育に偏重し、他の側面が軽視されているとの批判がある。

第三の特徴は、大学によって表現が異なるが、例えば「住学合一」、「学習無所不在（あらゆる場所

<sup>5</sup> 「兩岸高校現代書院教育論壇將於澳大舉行」『澳門特別行政政府新聞局ウェブサイト』、<http://www.gcs.gov.mo/showNews.php?DataUcn=102129>（2017年8月29日閲覧）。

<sup>6</sup> ここにおいて、中国語圏の大学で「書院」の一語が用いられるのは、伝統的な書院の持つ教養主義的イメージの取り込みという狙いのほかに、教学単位としての「学院」（英語の college/faculty、日本語の学部）に相当）との区別という実際的な理由があると考えられる。「学院」の一語を用いている北京大学では、「学系」（department＝学科）の上部の単位を「学院」ではなく、「学部」（英語では school）と称している。

に学びがある)」などの言葉で体现される考え方である。具体的には、授業外での学びの機会をいかに増やすかという課題への取り組みとして、問題解決学習や反転授業などと同列に位置づけられるが、教室での学びを「点」に終わらせず、「線」あるいは「面」として展開し、学習の生活化／生活の学習化を実現するための工夫という意味合いがある。このような関与は、行き過ぎれば管理主義という弊害を生むが、高等教育の大衆化という現実の中で、大学は面倒見の良さを求められている。

中国語圏における「書院教育」の広がりの中で注目を集めているのが、澳門大学が2014年のキャンパス移転を機に全面的に導入した寄宿式書院制である。その規模はアジア最大級を誇り、2016年に早くも現代書院制教育論壇をホストしていることから、大学の本気度が見て取れる。以下、第2節と第3節では、澳門大学の寄宿式書院制の全体像と具体的取り組みを論じてみたい<sup>7</sup>。

## 2. 澳門大学の寄宿式書院制 (Residential College System)

澳門特別行政区政府統計暨普查局<sup>センサス</sup>の『統計年鑑』によれば、2016年現在のマカオの面積は、30.5平方キロメートルでJR山手線内側(約63平方キロメートル)の半分ほどであり、人口は64万4,900人である<sup>8</sup>。高等教育機関は10校(公立4校、私立6校)、うち総合大学(university)が4校、単科大学に相当する学院(institute)が5校、ほかに警察大学校に相当する保安部隊高等学校がある<sup>9</sup>。1981年に東亜大学の名称で発足した澳門大学は、88年にマカオ政庁(99年にマカオ



写真 1 人工池が美しい澳門大学の新しいキャンパス (2016年2月29日、筆者撮影)

が中国政府に返還される以前のポルトガルの統治機構)によって公立化され、91年に現在の名称となった。当初は香港と同様、英国にならって学士課程を3年としていたが、1990年に4年制に再編した。現在、マカオで唯一の公立総合大学である澳門大学は、もともとタイパ島にあったが、2014年に川1本を隔てて西側にある中国広東省珠海市の横琴島にキャンパスを移した。物理的には横琴島の上にある約1平方キロメートルの土地は、上述した『統計年鑑』の総面積の計算から除外されているが、マ

<sup>7</sup> 澳門大学の寄宿式書院制のイメージを5分弱で端的に伝えるものとして、大学が英語・北京語・広東語の三言語で作成したPR動画があり、大学の公式YouTubeチャンネルで公開されている。[https://www.youtube.com/watch?v=L4\\_iq0ifzU&t=20s](https://www.youtube.com/watch?v=L4_iq0ifzU&t=20s) (2017年8月29日閲覧)を参照のこと。

<sup>8</sup> 澳門特別行政区政府統計暨普查局(2016)『統計年鑑2016』、29頁および45頁。なお、同年鑑は、統計暨普查局のウェブサイト(<http://www.dsec.gov.mo/>) (2017年8月25日閲覧)で入手が可能。

<sup>9</sup> 澳門特別行政区政府高等教育輔助辦公室 (<https://www.gaes.gov.mo/>)が毎年刊行する『高教統計數據彙編』では、公立の澳門大学、澳門理工学院、旅游学院、澳門保安部隊高等学校、私立の澳門城市大学、聖若瑟大学、澳門鏡湖護理学院、澳門科技大学、澳門管理学院、中西創新学院を大学に位置づけている。

カオ特別行政区の法律が適用される。インターネット利用環境もマカオと同様で、中国大陸では通常アクセスできないFacebook、TwitterといったSNSも使用できる。タイパ島の澳門大学旧キャンパス跡地は、旅游学院、澳門理工学院、澳門城市大学といった公私立大学のキャンパスとなっている。

2016年度版の『高教統計數據彙編』によれば、10大学の登録学生数は3万2,750人であり、98.37%に相当する3万2,215人が全日制に学んでいる。うち2万4,638人(75.23%)が学士課程に在籍している。本地生(マカオ出身者)に対する外地生(非マカオ出身者)の割合の高さがマカオの高等教育の特徴であり、外地生の総数は1万4,821人で45.25%を占める。その大半は中国出身者(1万3,949人)であり、香港出身者(344人)、台湾出身者(64人)と合わせると、その割合は96.87%に上る。澳門大学の学生数は1万29人で、大学院生が3,479人(サーティフィケート・プログラム在籍者120人を含む)、学部生が6,550人、うち3,692人(36.81%)が外地生である。唯一の公立総合大学である澳門大学では、全体傾向に比べて大学院生の割合が高く、外地生の割合が低い、外地生に占める中国・香港・台湾出身者の割合は95.10%で、全体傾向とほぼ同じである。ただし、澳門大学の3,692人の外地生は、いずれも学位取得を目的とする正規生の数であり、澳門大学註冊処の統計によれば<sup>10</sup>、27の国と地域の大学から派遣された136人が交換留学生として澳門大学で学んでいる(2016/17年度)。交換留学生でも、中国出身者の割合が最も高いが、60人と半数に満たない。第2位がポルトガル(16人)というのが澳門大学の特徴であり、日本が13人で第3位を占める。

移転によって約20倍の広さのキャンパスを得た澳門大学は、教育の内容と方法においても、新たな機軸を打ち出すことになる。「四位一体(four-in-one)」教育モデルの実践のため、約500人が入居できる寄宿式書院(residential college)を一度に8棟設置し、すべての新入生をそこに収容する態勢を整えた。キャンパス移転を機に、2010/11年度からパイロット・プログラムとして運営してきた寄宿式書院制を全学規模で展開することになったのである<sup>11</sup>。澳門大学が標榜する「四位一体」とは、専門教育、一般教育、研究インターンシップ教育、コミュニティ教育の四者の融合であり、深さと広さの双方を追求することを目的に、前二者は主に教室で、後二者は教室にとどまらず寄宿式書院や時にはキャンパスの外など、さまざまな場所で展開される。専門教育課程に対する一般教育課程は、2008年のカリキュラム改革で導入された。正規生に対する研究インターンシップ教育は、イノベーションと実践を強調し、科学研究に関する各種インターンシップの機会を大学が学生に提供する。その研究成果は、重要な学術会議や学術誌で発表され、国際的なコンテストで受賞する学生もあるという。キャンパス移転を機に寄宿式書院制が全学規模に拡大されたのは、コミュニティ教育の実践の場として、つ

<sup>10</sup> 澳門大学註冊処ウェブページ (<https://reg.umac.mo/>) (2017年8月27日閲覧)で歴年の統計資料の閲覧が可能。

<sup>11</sup> パイロット版の寄宿式書院制では、まず2つの書院が設置され、2013/14年度に3つの書院が増設された。キャンパス移転以前の取り組みについては、澳門大学ウェブサイトの当該ページ、[http://www.umac.mo/rc/pilot\\_rcp.html](http://www.umac.mo/rc/pilot_rcp.html) (2017年8月27日閲覧)を参照されたい。

まり、生活の場が即ち学びの場となることを意図したもののだが、「四位一体」である以上、書院生活は当然のことながら他の三領域とも関連する。澳門大学の正規生は、単に所定の単位を取得するだけでなく、各領域で設定された卒業要件を満たすことを求められる。以下、2016/17年度版の住宿式書院制ブックレット<sup>12</sup>と葉銘泉呂志和書院長の講演を基に、澳門大学の住宿式書院制の全体像を素描する。

葉書院長によれば、澳門大学による住宿式書院制の全面的導入は、大衆化、資金源の多様化、アカウンタビリティを求める社会の声の高まり、国際競争、科学技術の応用、学習効果測定の重視など、高等教育の世界的な地殻変動に導かれたものであり、多様性と流動性を高めることを目的とする。今日の大学卒業生は、大学で1つの専門を修めて国内企業に就職、生涯を通じて1つの仕事を全うすることが難しくなっている。グローバルな知識基盤型社会を生き抜くためには、1つの学問領域に埋没せず複数の領域を横断して物事を考え、単に知識を求めるだけでなく、技能と豊かな感情を持たねばならない。個人として競争に打ち勝つことよりも、他者と協調してチームで物事を進められることが重要であり、効率性(efficiency)より有効性(effectiveness)が求められる。他者から設定される期待に応えるだけでは不十分で、専門性の発展に向けて自ら方向性を定めることができなければならない。複雑化する環境の中で、大学卒業生は、内心の望みと外界からの期待を結合し、自分が何をしたいのかとともに自分に何ができるのかをしっかりと認識する必要がある。

こうした変化に直面して、大学の人材育成は、教室という場所、講義という方法に固執することはもはや不可能であり、大学生活の全局面を通じて体験から多面的な学びを得る機会を学生に提供することが急務となっている。澳門大学の「四位一体」教育モデルは、専門的な学び(specialty learning)を通じてハードスキル(hard skills)を、教養的な学び(liberal arts learning)を通じてソフトスキル(soft skills)を身につけることを想定しているが、後者の主たる担い手となるのがキャンパス移転から2年で8棟から10棟に増えた住宿式書院である。

澳門大学の住宿式書院制は、学生の全人的成長を促すための方法として、英国のケンブリッジ大学とオックスフォード大学、米国のハーバード大学、イエール大学、プリンストン大学、またアジアにおける先駆である香港中文大学のレジデンシャル・カレッジ・システムを範として導入された。主にハードスキルの養成を担う7つの学院(faculty=学部)と相互補完性を発揮しながら、体験型の学びによってリーダーシップを備えた人



写真 2 呂志和書院のダイニングホール(2015年9月8日、筆者撮影)

<sup>12</sup> 澳門大学住宿式書院制のブックレットの最新版は、<https://rc.umac.mo/rc-system-booklet/> (2017年8月27日閲覧) で入手可能。

材を育成する。

約 500 人を収容する寄宿式書院は、上述のように 2016/17 年度に 8 棟から 10 棟に増えた。新入生は原則として全員入寮、学部 2-4 年の学生と大学院生も、少なからずそこで暮らしているが、学生の希望によらず大学が割り振りを決めるため、寄宿式書院には学部を異にする学生が集まる。また、海外大学からの交換留学生も、いずれかの寄宿式書院に入居するため、寄宿式書院は、自ずと異なる学問的・文化的背景を持つ者が共に学び、共に生活する空間となる。

一般の学生寮と寄宿式書院の大きな相違は、特定の専門領域（ディシプリン）によらない体験型の学びの機会を提供するために、専従の人員を持つか否かにある。澳門大学の寄宿式書院には、書院長 (College Master) を筆頭に、副書院長 (Associate Master)、レジデント・フェロー（以下 RF と略記）からなる専任のアカデミック・スタッフがいる。書院長と副書院長は各 1 人、RF は 2 人程度で、内外の大学で学長、副学長、学部長などの経歴を持つベテラン大学人が書院長、准教授レベルの中堅研究者が副書院長、ポスドクレベルの若手研究者が RF を務める。書院長、副書院長は、専門領域の授業を各学部で担当することもあるが、本務はあくまで寄宿式書院での学術指導であり、通いではなく住み込みで学生の指導に当たる (RF も同様)。アカデミック・スタッフとは別に、専従の事務職員が数名おり、さらには学部の教員も、非居住 (non-resident) フェローまたは協力者 (College Associate) として活動をサポートする。澳門大学の教員は、誰でも教育・研究のみならず、寄宿式書院でのコミュニティ教育に何らかの形で貢献することを義務づけられている (週 1 時間相当)。また、学生も重要な役割を担っており、一部大学院生がレジデント・チューター (RT)、学部生がレジデント・アシスタント (RA) として書院の運営をサポートするほか、芸術文化／学生・コミュニティサービス／スポーツと健康／広報／企画のワーキング・グループからなる House Association (学生委員会) がある。

寄宿式書院の具体的な教育活動には、(1) 単発のセミナー、ワークショップ、講演会、(2) 長期的・組織的な体験型教育プログラム、(3) House Association が組織する全書院生向け活動、(4) 各フロアの RT/RA が組織する活動、(5) 学生がグループで企画・実施する活動があり、アカデミック・スタッフ主導の活動と学生主導の活動の両方が含まれる。

学生の居室は 2 人 1 室で、2 部屋で 1 つのシャワールームを共用する。諸活動のための共有空間として、パントリー、ダイニングホール、多目的ルーム、ダンス練習室、音楽室、大小のセミナー室、フィットネスルーム、喫茶室などがある。こうした基本設備は、10 棟のそれぞれに設置されているが、そのほかに大学のグラウンド、体育館、プール、バスケットボール・コートなどを利

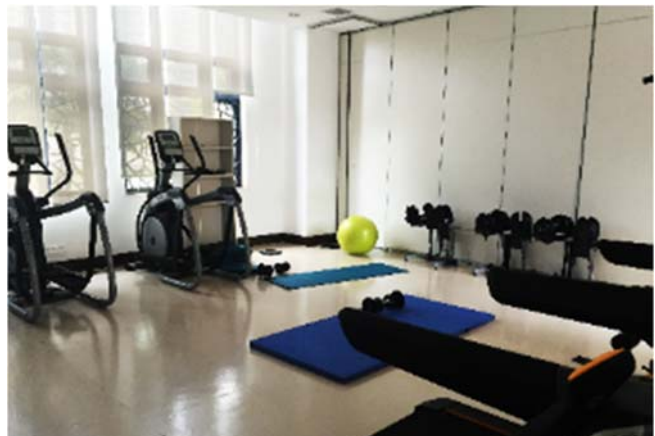


写真 3 呂志和書院のフィットネスルーム (2015 年 9 月 8 日、筆者撮影)

用できる。

豊富な人的資源と充実した設備に支えられた寄宿式書院制の使命は、学術的知識と相互補完関係をなすコミュニケーション力、幅広い関心、大学というコミュニティへの帰属感を備え、生涯を通じて学びうるオールラウンドな人材を育成することであり、知識・実践・態度の3つをモットーに掲げる。こうした使命とモットーの下で、5つのコンピテンシー（能力指標）を設定する。健康的な生活／人間関係とチームワーク／リーダーシップとサービス／文化活動への従事／グローバルな視野と市民性の5項目の能力指標は、寄宿式書院の諸活動と結びついている。例えば、学期に1回開かれるハイテーブルディナー（高卓晩会）は、年1回の参加が寄宿式書院の修了要件となる正式な活動で、数百人の書院生が正装に身を包み、外部から招かれた貴賓の講演を聴いたり、書院生自身が歌や楽器演奏を披露したりする中で、フォーマルな会食のマナーを身につけるイベントだが、この活動はもちろん、第2項の人間関係面での陶冶がその目的である。寄宿式書院の諸活動については、次節で呂志和書院の事例を具体的に紹介するが、総じてサービスラーニングを重視しているのは、能力指標の第4項との関連であり、それが時に国境を超えて行われるのは、第5項との関連である。

5つの項目での成長は、自己評価・ピア評価・教員評価の3つの方法で継続的に測られるが、いずれの項目においても、書院生活の経験を持つ学生が持たない学生を上回っていることが調査によって明らかになっている<sup>13</sup>。また、葉書院長の講演によれば、学業成績の面でも、書院生は非書院生より高いGPAの伸びを示しているという。書院生活のどのような要素がこの差を生んでいるのか、原因の解明が待たれるが、寄宿式書院制が学生に何らかのプラスの影響を与えていると考えられる。

キャンパス移転後の澳門大学の学生は、寄宿式書院の諸活動への参加が卒業要件となっている。2016/17年度版のブックレットによれば、学部1年から4年まで、学年ごとに要件が設定されている。

1年生が最も重く、上の学年に進むほど負担が軽くなる。例えば、1年生においては、ハイテーブルディナー：年1回参加、活動：学期に3回参加（うち2回は書院主催、あるいは書院のフロア、House Associationの主催によるものとする）、電子ポートフォリオ：毎年1月に自己評価を行い、5つの能力指標について新たに目標を設定、という要件が設定されている。要件を満たすことができなかった場合は、次学期または次年度に埋め合



写真 4 日本の食文化に関するフロア活動に参加（2016年2月29日、筆者撮影）

<sup>13</sup> この調査結果は、2016/17年度版の寄宿式書院生のブックレットで公表されているが、スポーツ（能力指標第1項に関係）、学生間の人間関係（第2項に関係）、リーダーシップ、コミュニティへの関心（いずれも第3項に関係）の各点で特に顕著な差が認められたという。



わせが可能であり、これによって卒業が認められないという事態に陥ることは少ないと考えられるが、寄宿式書院の活動への参加が入学から卒業に至るまで義務化されていることが寄宿式書院の正当性を高めている。

以上の理念と制度の下、澳門大学の寄宿式書院はいかなる活動を行っているのか、そのイメージをさらに明確なものとするため、10の寄宿式書院の1つである呂志和書院の活動を次節で紹介する。

### 3. 呂志和書院の諸活動—2016/17年度を例に—

マカオ出身の葉銘泉呂志和書院長は、高等教育を台湾で受け、工学者として台湾屈指の名門である国立清華大学で長年教育と研究に従事、学部長、副学長などの要職を歴任したあと、マカオに戻って呂志和書院の書院長となった。筆者と呂志和書院の縁は、2015年9月に調査研究のため同書院で聞き取り調査を行ったことに始まり、先方からの教育交流の申し出を受けて、2016年2-3月以来、呂志和書院と帝京大学の間で短期の学生の相互派遣が行われている。2017年7月までに、双方2回の派遣を実施しているが、4-6人の学生が1週間相手側を訪問、帝京大学の学生は、寄宿式書院の生活を体験する。本年7月3日の葉書院長の講演会は、2回目の呂志和書院生の日本訪問の間に行われたもので、筆者の科研費の分担者が勤務する目白大学を会場とした。

講演の中で葉書院長は、前節で述べた寄宿式書院制の理念と制度を説明した上で、呂志和書院の活動を豊富な写真とともに具体的に紹介したが、書院生活の様子がよくわかると参加者に好評であった。以下、その要点を紹介する。

4人のアカデミック・スタッフ（書院長、副書院長、RF）と4人の事務職員を専任として擁する呂志和書院は、現在488人の学生が生活し、その内訳は、1年生176人、2年生145人、3年生102人、4年生以上（院生を含む）65人である。設備は、前節の通り他の寄宿式書院と同じものだが、独自の施設として「心情茶室」と呼ばれる簡易カウンセリング室（相談室）を設けている。院生のRTが10人、学部生のRAが12人おり、RAはうち9人が2年生である。House Associationの3役（委員長、副委員長、書記）は、いずれも2年生で、5人のワーキング・グループ長も、2年生または3年生である。8人の専従教職員のほか、非居住フェローが10人、各学部の専任教員である協力者が34人いる。

寄宿式書院主催の活動には、(1)ハイテーブルディナー、(2)学者講座、(3)キャンパス活動、(4)海外交流、(5)サービスマーケティングがあり、このほかにHome Associationまたは各フロアのRT/RAなど、学生主体の活動がある。

英国のレジデンシャル・カレッジに由来するハイテーブルディナーは、学期に1回、ダイニングホールで行われる。筆者も、2016年2月に出席し、短いスピーチをしたが、このような貴賓による講演、学生による歌や楽器演奏などが行われる。学生にとっては、人間関係を深める機会であるとともに、社交性を高め、マナーを知ることでもある。

年数回行われる学者講座は、学内外の学者・専門家の講演会であり、2016/17年度には、心理学者の蔡宇哲教授（台湾・高雄医学大学）による「夢の殺人事件」と題する睡眠科学に関する講演（2017年8月17日）、物理学者の季向東教授（上海交通大学）による「宇宙の謎を解く中国の試み」と題する講演（同年8月27日）のほか、台湾出身のディズニーのアニメーターで『ライオンキング』などの作品を手がけた劉大偉氏による講演（同年9月7日）と創作ワークショップ（同年9月12-13日）、台湾出身で数々の流行楽曲を作詞した黄婷氏の講演（同年10月13日）、1998年から2002年まで国立清華大学の学長を務め、台湾で最も権威のある学術栄誉である中央研究院院士にも選ばれた情報科学者・劉炯朗氏（呂志和書院の Founding Master = 名誉書院長でもある）による講演「言語と文化のちがいについて」（2017年3月2日）が行われている。これらの講演は、いずれも各分野で豊富な経験と実績を持つ学者・専門家によるものだが、その内容は教養的な性質のものであり、高度な内容を平易な言葉でわかりやすく語るといったコンセプトに貫かれている。

キャンパス活動には、寄宿式書院を単位として参加する運動会が毎年の行事としてあり、昨年は、大学創立35周年の記念展にも展示を出している。また、期末試験の直前には、料理上手な葉書院長が自ら腕をふるい、書院生に湯圓（中国風の白玉しるこ）を振舞ったという。

呂志和書院でも、国際交流とサービスラーニングに力を入れているが、国際交流として、帝京大学との交流プログラムのほか、台湾の国立清華大学、高雄医学大学（いずれも書院教育を行っている）との間で双方向の交流が行われている。サービスラーニングは、マカオ、海外、遠隔の3つの類型を含み、マカオでは、低所得地域の子どもと老人に対する支援、海外では、ベトナム農村でのバイオトイレ建設や英語教育、タイ農村での橋梁の建設、中国福建省での土楼の修復、台湾での地域イベントなどに書院生が参加している。また、中国四川省の小学生160人に週1回オンラインで英語を教えるという活動も行われている。寄宿式書院は経費を補助するが、丸抱えというわけではなく、書院生自身がバザーや寄付を募るなどの方法で資金調達に動いているという。

以上のほかに、マカオへの理解を深め、帰属意識を高めるための活動として、「認識澳門（マカオを知る）」と題する企画があり、保安部隊高等学校訪問、民政総署（特別行政区の役所）主催の会議への参加、マカオの有名な中国書道家による教室、地元中等教育学校との連携などに学生が参加している。

学生主体の活動も数多くあり、ハロウ



写真 5 呂志和書院で行われた帝京大学訪問団との交流会（2017年2月21日、呂志和書院スタッフ撮影）

イン、中秋節といった季節のイベント、新入生歓迎活動、幹部学生（RA/RT）のトレーニング、バスケット、チアリーディングなどのクラブ、タレント・ショー（バンド演奏、ダンス、歌などを披露する一大イベント）などは、教職員ではなく学生が主体となる。

以上で述べたのは、ここ1年間の活動であり、学期中はほぼ毎週、大小の活動が行われ、学生は自らの関心に応じて、それに参加することができる。今年2月、帝京大学の学生4人が呂志和書院を訪れた際も、50人を超える書院生が学生のプレゼンを聴きに集まってくれた。

葉書院長は講演の最後に、住宿式書院と宿舍の相違を次のようにまとめた。書院は学びの場であり、宿舍は睡眠の場である。書院の人間関係は緊密だが、宿舍の人間関係は希薄だ。書院では各種の学習機会に関心を注ぐが、宿舍で関心を持つのはわが身のことだけである。書院を出て考えるのは人生の方向性だが、宿舍を出て考えるのはどうやって金をもうけるかに過ぎない。つまり、書院は大家族のようなものだが、宿舍はホテルのようなものだ。もちろん、澳門大学の10の住宿式書院は、それぞれ特色をもって運営されているが、そこが家族的な雰囲気を持つ学びの場であるという点は、すべての住宿式書院に共通する特徴と言えるだろう。

## おわりに

以上、本稿では、中国語圏の大学に広がる「書院」を澳門大学の事例を中心に紹介した。地域で唯一の公立大学に集中する豊富な資源に支えられ<sup>14</sup>、キャンパス移転というタイミングにも恵まれた澳門大学の住宿式書院制は、他の大学が容易に真似できるものではないだろうが、高等教育改革の壮大な実験の1つとして、その成否が貴重な示唆をもたらすと考えられる。また、日本の教育研究においてこれまで注目されることがほとんどなかったマカオに、こうした興味深い動きが現出していることを指摘したこと自体、一定の意義があると思う。

中国・台湾・香港・マカオの「書院教育」は、多くのものを共有し、相互に関係しあいながらも、それぞれの教育の歴史的文脈の中で、安易に一括できない独自性を持っている。筆者の科研費では、今後も中国語圏の「書院教育」の動きを追っていく。今年度内にも、台湾からゲストを招いて2回目の講演会を予定しているので、ぜひご注目いただきたい。また、多数の写真を含む葉書院長の講演資料をご所望の方は、筆者までメール(yama708@main.teikyo-u.ac.jp)でご連絡を賜りたい。

本研究は JSPS 科研費 16K04625 の助成を受けたものです。

<sup>14</sup> 政府から投入される公的資金に加えて、マカオ、香港では、民間からの寄付が高等教育の重要な財政的リソースとなっている。澳門大学の各書院の名称には、主たる寄付者の名前がクレジットされるが、呂志和書院の名称は、カジノとホテル経営でギャラクシー・エンターテインメント・グループの創業者で、アジア屈指の大富豪として知られる呂志和氏に由来する。